

国語慣用句辞典

白石大二編

編者略歴

明治四五年愛媛県今治市に生まれる。
昭和一〇年東京大学文学部国文学科卒業。文部省調査局国語課長を経て、現在早稲田大学教授。著書に、兼好法師論（三省堂）国語学原論（朝倉書店）日本口語文法（法政大学出版局）日本語の発想（東京堂出版）日本語発想辞典（東京堂出版）古典読解辞典（共著・東京堂出版）その他多数ある。

国語慣用句辞典

定価 二二〇〇円

昭和四四年八月三十一日 初版発行
昭和五六年七月一〇日 二二版発行

編者 白石大二

発行者 岩出貞夫

印刷者 理想社印刷所

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒100）
電話東京二三一三七四一 振替東京一七

はしがき

「慣用」「慣用語」は、字義的には、慣れ用いる、習慣として用いる、慣れ用いられる語、習慣として用いられる語である。しかし、その習慣の関するところは、広く一般的な社会であつたり、ある特定の限られた分野、方面であつたり、個人であつたりする。あいさつ語、応答語の類は広く社会的なものであり、官庁用語、専門用語、文学語の類はそれぞれの分野・方面で使われるものであり、言い癖・書き癖・文体語の類は個人的なものである。

これらに対して、「慣用」「慣用語」には、一つの社会・種族・国を構成する人々、または、一つの地域・国の言語 (language of a people or country) の言語の特殊な性格 (specific character of this) の言語に独特な表現形式 (form of expression peculiar to a language) などの意味がある (Oxford Illustrated Dictionary)。

大塚高信氏は、イデオムの解説において、最後の文句が「砂糖かな」で終わる俳句を得々とひろうされたイギリス人の先生のそう話を紹介されて、

イギリス人も日本人も、同じ人間であるから、白いものを白と見、赤いものを赤と見ることに違いはない。だから「雪の肌」^{はだ} “white as snow” のように共通の表現はあるけれども、イギリス人は白さを感じるとき、

white as milk, white as wool」といういい方をするが、吾々は雪以外には白さを痛切に感じない。砂糖に白さを感じるのは milk に白さを感じるイギリス風の感じ方である。Seiden 先生には white as sugar は平気であったが、吾々には変だった。(なお、英語の基礎語と日本語との比較研究については、服部四郎氏『英語基礎語彙の研究』参考)

といい、続けて、

組合わされた個々の単語の意味からは全体の意味がでて来ないようないわゆる熟語は、その言語のイデオムに違いないが、イデオムというものはそんなに限られたものだけを用いるのではなくて、その言語に特有な言い方を全部含めたものをいう。

とされている。『英文法演義』16イデオム)

この本の解説慣用句論では、著者なりに、言語の慣用、慣用句について述べて、この本の解説としておいた。個々の語句の解説では、出自・由来を明らかにするとともに、事実と歴史とを混同しないことがたいせつである。たとえば、旗は、それぞれの集団、国、教義の徴表として、たいせつなものである。その「旗の下に」団結し、その「旗を振って」一団を統率するのである。それだけに、旗の意味するところは、方処により、時代を異にすることによって差異を生ずる。

「旗日」などという語が生じたのは、その典型的な例であろうか。

大言海では、

はたび (名) 旗日 (日ノ丸ノ国旗ヲ国毎ニ掲グル日ノ義) 大祭、祝日ナドノ称。戸戸ニ国旗ヲ掲グベキ

日。(明治以後ノ語。五節句、物日ナドニ代リ、巧ニ成レル新語ノ魁サキガケ)
と説明してある。これを、それにならって、

国民の祝祭日。家ごとに国旗をかかげるべき日。

各戸に国旗を掲げる日。国民の祝日。

などと説明すると、歴史的な事実と、現代の事実との混同をきたしはしないかの疑問が生じる。はたして、終戦後の今日では、「旗日」という語とその事実があるかどうか。例示のような説明は、「国民の祝日に関する法律」の背景などによっているのであろうが、事実にあっているかどうか。

たった一つの語句でも、その歴史・現実の説明には、容易ならぬものがある。先人の御努力によりながら、あやまちなきを心がけたが、今後よりいっそう完全を期したい。

この本は、広く慣用句と考えられるものについて、できるだけその典型的なものを掲げて示したが、一つの特色は、言語構成要素間の関係を、範例的に説明しようとしたことである。

たとえば、「からだをふく」「汗をふく」「床をふく」などの言い方は、どういう典型に属するであろうか。重ねて、大言海を見てみると、

ふく (略) 他動、四 拭 「吹き払フ意カト云フ」ぬぐふ (拭) ニ同ジ。

とある。もし、この語義説が正しいとするなら、その根拠には、次の醒睡笑の「吹く」などがあげられようか。

太閤御所、風呂に御入りありつるを、蜂屋伯耆守、「御垢にまゐらん」とて吹かけけるやう、「知行くれいく、知行くれいく」と、拍子にかかり興を尽されし。そのまま蜂屋を捕へ、「是非吹かん」と仰せある。さまざま辞退せらるるを、無理に吹かせ給ふやう、「奉公せいく奉公せいく」と。作意のはやさ短舌のべがたし。(本文「ふろに入る」参照)

この「吹く」は、「風呂に入つて温まった体に息を吹きかけて、垢を搔くこと。風呂吹く。」(角川文庫注)である。息を吹きかけるのである。

「からだをふく」は吹く動作で、「からだ」はその対象であり、「あかをふく」は、からだを吹く結果あかを除くので、あかは除去する対象であり、「ふく」が除去する意味のように考えられてくる。それから、「汗をふく」「床をふく」になつてくる。ぬぐう方法・手段も、息を吹くのではなく、ぞうきんなどということになる。

このように考えられるとするなら、「からだをふく」の類は、この本で、成句的慣用句を四つの種類に分けた第二类・第四類となり、ヲ格の続きようは、「のこをひく」(対象)、「木をひく」(場所、材料)、「板をひく」(結果)の類例となる。(解説、六 語句のしくみと転義参照)

この本では、こういう、動詞とその取る助詞との関係を考へて、成句の意味構成を考へた。ガ格・ニ格・ヲ格などというものは、その助詞によつて類別したものである。ガ格というのは、ガ格と動詞との結び付きの密なものに名づけたのであつて、一般の主格をさすのではない。広く主語、述語の関係にあるものは、〇格とでもいふべきものである。

索引も構成要素別索引と題したのは、こういうこの本の特色に関連するものである。

この本の成るについては、多くの恩師・先輩・同学のかたがた、また、市井の庶民として學問を愛した両親・兄弟姉妹に感謝の心をささげなければならない。わけても、橋本進吉、西尾実、湯沢幸吉郎の三先生のもとで辞典編集の基礎作業に従った終戦までの何年かの貴重な経験からは、言いようのない恩恵を受けた。特にこのことをしるして、お礼のことばとする。

昭和四十四年七月二十八日

白石大二

例言

一 辞典の部分の見出しの語句は、現代表記によって、五十音順に配列した。助詞の「は」「へ」「を」は、その字の呼び名によった。

一 説明は、現代表記によった。

一 語句の意味は、原則として、構成要素の語の意味によるもの、ひゆ的な使い方によるもの、目的・方法・理由・結果などを表わすもの、全体で構成要素による意味と違った意味になるもののような順序で示した。

一 原則として、語の意味ごとに、適宜、引例を付した。

一 引例は、原則として時代順にあげた。

一 引例の出典は、書名・巻数・段数・歌番号、著者名などを、この順序に従って示した。ただし、著名なもの、未詳のものなどは、適宜、省略に従った。新聞記事の類は、囲み記事の題名を示したものなどを除いて、原則として、出所をあげなかった。

一 引例によっては、適宜かっこ（ ）に包んで、二様以上のものをあげ、また、現代語訳を注記したりした。

一 引例の本文に異文のあるものは、必要に応じて、適宜、傍書しあるいは、かっこ（ ）に包んで注記した。

一 古事記・日本書紀・万葉集などの原文の語句は、適宜、かっこ（ ）に包んで示した。文意を明らかにするため原文の他の個所に見える語句を注記したものも、かっこ（ ）に包んで示した。

一 説明を付記したものなども、かっこ（ ）に包んで示した。

一 文意を補うもの、現代語訳などは、かっこ（ ）に包んで示し

た。「一」の中は、原則としてかたかなを使用した。

一 引例の漢字は、原則としてそのままとし、字種・音訓について、当用漢字外のもものは、その項目の初出の所に、適宜ふりがなを付した。慣用の久しかったもので、当用漢字で読めるあて字の類は、必ずしもふりがなを付さなかった。また、字本位に付した。固有名詞には、原則として、ふりがなを付さなかった。なお、当用漢字以外の字体で当用漢字に準じたものがある。

一 引例のかたづかいは、(1)古文・文語文においては、原則として古典かなづかいに統一した。ただし、滑稽本などの類で表音的になっているものは、適宜、現代表記の方法によった。現代表記によっているものは、そのままとした。また、促音・拗音を小書きにしたものもそのままとした。(2)現代口語文においては、そのままとした。

一 引例の送りがないは、(1)古文においては、動詞は原則として活用語尾を送ることとし、その他はもとのままとした。(2)現代の文語文・口語文においては、そのままとした。漢文の送りがなは、原則としてかたかなにより、読みはひらがなによった。ただし、引例の本文によったものはそれに従った。

一 引例の句読点は、もとのままとした。マルをテン・マルに通じ、テンを欠き、テンの代わりに一字あきにしたものなどは、そのままとした。引例・注記の最後のマルは、原則として省いた。

一 項目全体について、またある意味について、本文の項目、解説などを参照すべきものは、○印の下に、その項目の見出しの語句解説のページなどを示した。また、参考すべき語句も、○印の下に掲げた。その区別は、「参照」「参考」の語によった。

はしがき……………一六

目次……………七

例言……………八

解説慣用句論……………一八

国語慣用句辞典……………一六

構成要素別索引……………二七～三八

解說
慣用句論

IT 11

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

解説 慣用句論

一 言語の本質と慣用

——擬声語言語起源説の意味するもの——

平田篤胤は、古史本辭經に、次のようにいう。(句読点、かたかなによるふりがなは原文による。ひらがなのふりがなは、筆者の付したものである。)

さて言語は、^{オソコ}聲音より起ること素にて。其の五十聯の^{モト}聲音に。各々自然に意あり。象あり形あり。其は人の世に經る。事わざ繁き物なれば。見る物聞く物につけて。情その中に動きて。其の聲種々に發る。然るは物有れば必ず象あり。象有れば必ず目に映る。目に映れば必ず情に思ふ。情に思へば必ず声に出づ。其の声や。必ず其の見る物の^{アツ}形象に因りて。其の形象なる声あり。此を音象と謂ふ。(一、五十音義解上第六・平田篤胤全集一三)

時枝誠記氏は、その『国語学史』において、この「物有れば」以下をあげて、

やはり思想の音声的移行として言語を見て居るのであつ

て、事としての言語の考方である。(第一部 序説)として、氏の言語過程説の正当であることの一つの根拠としておられる。また、山内得立氏は、『意味の形而上学』において、同じく、「物有れば」以下「其の形象なる声あり」までをあげて、

それは誠に言語の成立に関する至言であつた。言葉は文字通りに事の葉である、物の存在ではなく事の表現である。物をそのものとしてではなく、それを形象に於てあらしめる。声は其の見るものの形象に因るのみでなく、声自らが形象である。形象とはものの在り方として訓ぜられた。物は何らかの在り方なしには存在することができないばかりでなく、何物かとしても把握し得られないのである。形象する事物は既に物ではなくして事であつた。物は事として始めて事物たるを得るのである。事物は物と事とをふくむというよりは事としての物であり、物としての事であり、事を外にしては物はなく、事にして物の形象たらざるものはないと言うべきである。事物は単に現象するの

みでなく形象する、否形象するということが現象の最も具體的な性格であつたのである。事物は言表されることなくしてもなおそこにあると考えられるが、言表すとは単に言葉にのせることではない、事物のそれ自らに於てそれ自らを表現することが即ち言語作用であるに外ならなかつた。(第九 表現と文述)

といい、やはり氏の言語説の解説に当てておられるようである。単に言語を事として考えるのではなく、物を單なる客觀的な存在物としてみるのではなく、物と、事、ことばとの一体觀を述べていると考えられるのである。

そう考えることによって、言語は、單なる事物、物事の表現ではなくて、それ自体絶対のものであり、抜き差しのできないものとなる。

しかし、それは、言語の本質であつて、言語は、その社会時代によつて異なるものである。

この篤胤の考えは、篤胤自身、この部分のすぐあとのほうに、「彼の音声考に。(略)と云へるも然る言なり。なほ其の書を見るべし」といつていることからみてもわかるように、鈴木朗の雅語音声考によるものである。すなわち、雅語音声考の冒頭に、次のようにいう。(原文は、かたかな書きである。ここでは、ひらがなに改めた。また、句読点「・」はここでは「。」で示す。なお、注記の所などには、適当に補つた。) 言語は音声也。音声に形あり姿ありこゝろあり。されば

言語には。音声を以て物事を象りうつす事多し。下にしもじもじの附く詞は本よりにて。きらくしすしふと入る。さとかをのたぐひさらぬ詞にも亦多くはある事を。人多くは心つかず。今其の大概を頭はさんとして。その類ひを四つに分つ。一つには鳥けものゝ声をうつす。二つには人の声をうつす。三つには万物の声をうつす。四つには万の形有様意しわざを写す是也。下に次々に挙ぐるを見るべし。或人云ふ。近頃江戸人の作れる神書に此の説既に見えたり。予云ふ。それは、予江戸にありし時。石川雅望、此の稿本を見て写し置きたるを、輾転して見たる者のしわざなり。彼が我より先なるにはあらず。

この朗の説くところと、篤胤の説くところとを比べると、本辞経の「然るは」の前後の説明は、音声考の「されば」の前後に比べると、数等精細で、深いものがある。それが、時枝・山内の両氏の、自説の一つの証拠とすることになったのであるが、音声考には、別に、言語の変遷を説くところがある。

すなわち、音声考には、あとのほうに、次のようにいう。

されども音声のこゝろと云ふもの。いと／＼ほのかなる事なる上に。古書に見えたる古語といへ共。上古の代々を経て輾転したる事も多かるべければ。今あげたる中にも違へる事もあるべく。又は初は音声によりたる事なるべきも。今にては其の意の知りがたき事も多かるべき也○凡て下をともじにて承けて。漢語に何然。何乎と云ふたぐひの

詞は。大かた音声にて形容したる詞なり。又下につくてにはのし。けし。やか。らか。めくの類ひの。上の詞も亦同じく。皆々音声によれる言かと尋ぬるに。多くはさもあらぬは如何といふに。音声に因りて言語の出で来るより。言語にはおのづから言語の意あるを。やがて其の言語のころを以て物事をたとへ象どる事あり。音声のころは本にして事せばく。言語の意は末にして事広し。たとへばきらくしすいなど云ふは。音声の意にて象りたるを、みちくし物しなどは。言語の意にて象りたるものなり。此の二つの別ちある事をするべし。

然らば言語の本は。専ら音声の意によるもの歟。答へて云ふ。音声を以て言語とする時に。ころある音声と心なき音声とあり。二つ共に。言語となりての後にては。言語の上の意ありて。其のころ輾転変化して万事の用をなす。心のなしにて。言語の意かへりて音声にうつる事あり。かの道々し物ししたぐひなり。

言語には、音声によって言語となつたものと、それがさらに、その意味によって他の言語となつたものがある。これは、言語の変遷を認めるものである。

篤胤は、本辞経のあとのほうで、「凡て下をともしにて承けて」以下「(言語には) 音声の意にて象りたる(略) 言語の意にて象りたるもの(略) 此の二つの別ちある事をするべし」までの部分を引いて、「凡て物の鳴り音には雅俗なし」の根拠

としているが、それにしても、少なくとも、その中での変遷を認めなければならないのである。

国学者には、伝統的に、心と事とことばとの相応し相称するものであるという考えがある。

たとえば、釈契沖は、源注拾遺に、次のようにいう。

一　またまころに思ひ聞え給ふべき人もなければ○今案、まごころは俗に真情なる人といへり。心にいつはりなきを真心といひ、言に偽なきを真言といふ。道を知る人かならず心と言と相応して共に偽なし。其の中に心は知りたき物なるに、言に顕はれて知らるゝ故に、真心を真言と云ふなり。誠信等の字は心の偽なきをいふに、言に从がへてまことゝよむを思ふべし。(若菜上三四・契沖全集六)

抑意と事と言とは、みな相称へる物にして、上つ代

は、意も事も言も上つ代、後の代は、意も事も言も後の代、漢国は、意も事も言も漢国なるを、書紀は、後の代の意をもて、上つ代の事を記し、漢国の言を以て、皇国の意を記されたる故に、あひかなはざること多かるを、此の記は、いさゝかもさかしらを加へずて、古へより云ひ伝へたるまゝに記されたれば、その意も事も言も相称ひて、皆上つ代の実なり。是もはら古への語言を主としたる故ぞかし。すべて意も事も、言を以て伝ふるものなれば、書はその記せる言辭ぞ主には有りける。(一、古記典等総論)

契沖などでは、国や時代による言語の差異をそれほど意識していないようであり、篤胤などになると、言語を国や時代を超越して考えるところがあるが、本居宣長に見られるような、言語において国と時代との差異を重視する考え方は、国学の基本的なものとしていいであらう。

このような考えは、わが古語の発生を擬声語に求める擬声語言語起源説を説く雅語音声考にも見られるものであつて、言語の最も自然的普遍的なものである擬声語にも、言語の慣用が考えられることを示すのである。

擬声語と慣用との関係については、改めて述べる。

二 言語表現の完成とひゆ

平田篤胤は、古史本辭経に、一にあげた部分に続けて、次のようにいう。

抑^{ソコ}音象^{ネイゾウ}にかく。自然の定まり有りて。言^{コト}と成るに。其の言必ず。其の見る物を指し象^サりて。嗟嘆^{サタタ}せるに形はる。其やがて其の情の。中に動くに因ること上の如し。(注略)さて言有りて後に語あり。語ありて後に詞あり辞あり。是すなはち声音語詞辞の次第なり。然るに其の言語詞辞なほ意を尽さず。是に於て譬論^{ヘイロン}あり。形容の言あり。如此して言語の道始めて調へり。

篤胤は、声・音、言・語、詞・辞に次第を見いだしているのである。それでは、声と音とどちらが高次のものか。言と

語との関係はどういうものか。必ずしも明らかでない。

この引用に略した注記には、毛詩国風關雎の序に、「詩者志之所^ハレ也。在心^ハ為^レ志。發言^ハ為^レ詩。情動^ハ於中^ニ而形^ハ於言^ニ。言^ハ之^ハ不^レ足^ニ故^ニ嗟^ニ嘆^ニ之^ニ。嗟嘆^ハ之^ハ不^レ足^ニ故^ニ永^ニ歌^ニ之^ニ。永歌^ハ之^ハ不^レ足^ニ知^ニ三^ニ手^ニ之^ハ舞^ニ之^ニ。足^ハ之^ハ蹈^ニ之^ニ也。情發^ハ於^ニ声^ニ。声成^ハ文^ニ。謂^ハ之^ハ音^ニ」とあるのを引いて、これが本文の意味あいであるといっている。これからみると、音のほうが高次のものとなる。それで、「声音」というのであろうか。

大矢根文次郎氏の説くところでは、説文とその解説によれば、言と語とは、直言と論難との別があり論難にも二つの別がある、「言語」で、言語活動を意味することである。

説文では、「直言を言といひ、論難を語と曰ふ」といつているし、また、「語は論なり」といい、段注では「語とは禦なり。毛説の如きは、一人是非を弁論する、これを語と謂ひ、鄭説の如きは、人と相答問弁難する、これを語といふ」とある。「思った通りに言うのが直言で、不正や誤りを取り上げて互に非難攻撃することが論難である」というのが説文の義である。「一人是非を弁論する」というのは、別に相手を意識想定せずに善悪を弁論するということ、毛説の語義である。それに反し、「人と相對して問答弁難する」のが鄭説の語の義であらう。今様にいえば、音声や文字で互に思想・感情・意志を表現し、相手と伝達しあう活動が言語ということになる。(世説新語の言語篇に

とにかく、驚嵐は、声音が言語となり、それが体言や用言のような実辞の詞と、テニヲハともいへば形式語の辞とに分かれるが、具体的な言語表現においては、言語詞辞だけでは、なお、じゅうぶん意を尽くさないというのである。たとえばと形容の言によって初めて言語の道が調うというのである。

それでは、たとえと形容の言とは何かという、たとえは、狭義のひゆであり、形容の言とは、擬声語の類である。

具体的にいうと、篤胤は、たとえに、日本書紀の「カタニニ葦
牙ハナ」^{「たへば」}「タニニ浮雲ウキクモ」^{「たふらふ」}「タニニ海上浮雲ウミノウキクモ」、古事記の「タニニ久羅下那クワゲナ」^{「たふらふ」}「タニニ幣流ハナ之時ノトキ」^{「たふらふ」}などをあげ、形容の言とは、古事記の「タニニ古々哀々ココアコ」^{「たふらふ」}「タニニ邇画ニガハ成ナリ」^{「たふらふ」}（許哀呂許哀呂邇画鳴ニガハナリ）「タニニ玉緒母由良タマオモヨウラ」^{「たふらふ」}「タニニ邇取ニガトリ由良ヨウラ逆志サカシ」、出雲風土記の「タニニ河舟カフネ之毛々ノモモ曾々ソゾ呂々ロロ邇ニガ」、大
祓詞の「タニニ持可々モチカカ吞氏武ツクシタケ」^{「たふらふ」}などをあげている。形容言の中には、
日本書紀の「タニニ皓然咄囁コハニトトノソ」^{「たふらふ」}をあげているのは、擬声語と考えた
のであろうか。

篤胤のいう「こととひ」とは、実際の個々の言語活動であり、「こととひの道調ふ」とは、修辞によって言語表現が完成するというようである。それでは、そのために使われるたとえ、形容の言は、どれだけ社会性を得ているものであろうか。死んだひゆでは、生々躍動のものとはならない。

それでは、社会的慣用によるひゆとはどういふものである

慣用句論

うか。

ここに篇胤のあげている「あしかび」「浮きあぶら」「海の上の浮き雲」「くらげ」などが、どれだけ社会性を帯びたものか。そこに、少なくとも時代差の見えることは、ひゆの慣用性を考えさせるものである。

それでは、ひゆと慣用との関係は、どういふものであらうか。

その詳細については、擬声語の問題とともに、あとに重ねて考えることにする。

三 擬声語の位相

源氏物語の若菜下に、

「柏木ハ」遂にこれ「女三宮ノカラネコ」を尋ねとりて夜も、あたり近く臥せ給ふ。明けたてば、猫のかしづきを、撫で養ひ給ふ。「カラネコノ」人げ遠かりし心も、いよく馴れて、ともすれば、衣の裾にまづはれ、より臥しむつるゝを、まめやかに、「うつくし」と思ふ。「柏木ガ」といたく眺めて、端近く寄り臥し給へるに、「カラネコガ」来て、「ねうく」と、いとらうたげに鳴けば、かき撫でて、「思イハ」うたてもすゝむかな」と、ほゝゑまる。「恋ひわぶる人の形見と手馴らせばなれよ何とて鳴くねなるらん これも、昔の契りにや」と、顔を見つゝ、のたまへば、いよく、らうたげに鳴くを、ふところに入れて、